

「生き生きとした希望」

ペトロの手紙Ⅰ 1:3-5

2025年11月2日
野村 友美 師

＜召天者記念礼拝にあたって＞

今年もこうやって、皆さんとご一緒に召天者記念礼拝を行うことができ、本当に感謝です。

先ほど前任牧師の松田基子先生から、お二人の方の思い出を語っていただきました。先に天に召された愛する方たち、信仰の先輩たちの名前と写真が並んだボードを見ていると、神様がこのお一人お一人を通して、呉教会を導いてくださったことを改めて思われます。

教会はその始まりの時から、イエス・キリストの死と復活によって開かれた天の国への道を歩み続けていく共同体です。イエス・キリストの十字架での死が、そしてその死からの復活が、教会が受け継いできた信仰の土台であり、中心だと言っていいでしょう。

ですから教会につながるということは、イエス・キリストの死によって罪の力から解放されて、復活の命に結びつけられて、新しい生き方へと招き入れられることです。

この体の命を生き終えたらそれで全部がおしまい、ではありません。死を超えて生きる、天の国の命の希望。そして、私たちが一生のうちに見ることができる現実を超えて、神様がこの世界に起こしてくださる愛と救いを確信する希望。この希望を抱いて生きるようにと、私たちはみんな招かれているのです。

今日ご一緒に耳を傾けている聖書の言葉も、この希望を掲げています。

＜天の国の命の希望＞

神は豊かな憐れみにより、わたしたちを新たに生まれさせ、死者の中からのイエス・キリストの復活によって、生き生きとした希望を与えてくださった。そう聖書は宣言しています。

ただの希望ではなくて、「生き生きとした希望」が与えられているということです。

「生き生きとした」というのはとても素敵な響きですが、じゃあ具体的にはどういうことなのでしょうか。

例えば「生き生きとした植物」というと、私たちは瑞々しい葉っぱや咲いたばかりの花や、ますます伸びていきそうな枝、顔をのぞかせる新しい芽を思い浮かべるでしょう。まだまだ、これからもっと、伸びて広がっていく力を感じさせる。そういうものに、私たちは「生き生きとした」という表現を使うように思います。

生き生きとした希望。

それはまず第一に、決して絶望に終わらない希望ということでしょう。私たちの人生は、上手くいくことばかりではありません。大それた願い事だけじゃなくて、生きていくにあたってのささやかな願いでも、叶うこともあれば叶わないこともあります。

幸せでありたい、良い人生を送りたい、家族や友人や愛する人たちが元気でいてほしい。

「これだけは」と必死で願って祈っているのに、叶わないことだってあるでしょう。

そんな時に「ああ、もうダメだ。ここで終わりだ」と諦めてしまわずにいられる希望。思い通りには叶わなかったとしても、最終的には「良かった」と思える希望。そういう希望がイエス・キリストの復活によって与えられているのだと、今日の聖書の言葉は私たちに伝えています。

その際たるものが、死を超えて生きる命の希望、そして死によって引き離された愛する人たちとの再会の希望なのではないでしょうか。

もちろん、誰もがいつかは死の時を迎えます。それはどんな人でも避けられないことなのだと、私たちは経験として知っていますでしょう。生きている以上どうしたって、死が私たちを引き離す時はやって来ます。どんなに大切な相手にも、どんなに素晴らしい人でも、どんなに多くの人たちから慕われていても、死は平等に訪れるものです。

わかっていても、ずっと一緒に生きていたかった愛する人たちとの別れは本当に辛くて悲しくて、もう会えないという事実は私たちの心を傷つけます。そしてその別れは必ずしも、穏やかで納得できるものになるとは限りません。

今この時にも、私たちが生きているこの同じ世界のあちこちで、理不尽な出来事に命を奪われている人たちがいます。戦争で、暴力で、飢餓で、災害で、病気で、思いがけない事故で、もっと生きられたはずの命が断ち切られてしまっています。

この悲惨な現実だけに目を向けるなら、そこには何の希望も見られません。失われた命は、ただ失われただけで終わってしまうことになるでしょう。

ですが、神様は豊かな憐れみによって私たちを新しく生まれさせ、死者の中からのイエス・キリストの復活によって、生き生きとした希望を与えてくださった。そう聖書は高らかに宣言します。

どんな形で、どんなタイミングで、どんな理由で断ち切られた命も、そこで終わりではないということです。

まだこれから、もっと先へ、さらに伸びて広がっていく、生き生きとした希望があるのだと。

私たちの、すべての人の罪を背負って十字架で死なれた神様の独り子イエス・キリストは、その死からよみがえられました。このイエス・キリストの復活の命によって、死を超えた命の希望が差し出されたことを、教会は2千年以上もこうして伝え続け、また生き方とし続けています。

一昨年、天に召された恩師が最後に私にくださったのは、「また会えるよ」という言葉でした。離れた場所に住んでいて、末期の癌を患っておられた恩師と、次はいつ会えるかわからない。そういう状況の中でやっと顔を合わせられて、帰り際も離れがたくてぐずぐずしていた私を、恩師は「また会えるよ」と笑って送り出してくださいました。

ああいう時に気休めの嘘をつく人ではありませんでしたから、あの「また会える

よ」は心からの言葉だったと思います。だからこの人生の先で「また会えるよ」の約束が果たされる日を、私は楽しみにしています。

<生き生きとした希望>

そう、イエス・キリストの復活によって私たちに与えられた「生き生きとした希望」は、私たちだけでは終わりません。決して途絶えることがない希望、力強く続いていく希望として、それは私たち一人一人の人生を超えて、脈々と受け継がれていくものでもあります。

先に天に召された愛する人たち、信仰の先輩たちの誰一人として、その命はその人だけでは終わっていないでしょう。

子どもを産み育てることで、次の世代に命を繋いだ方々もおられます。語った言葉で、またその生き方で、次の世代に影響を残していった方々もおられます。そして何よりも、一人の信仰者として生き抜かれたというその事実が、今こうしてこの教会の歴史を繋いでいます。

命の与え主である神様を愛し、罪から救い出してくださったイエス・キリストを愛し、共に生きる人たちを愛する信仰が、あとの私たちに受け継がれています。いつの時代もそうなのかもしれませんが、私たちが生きている現代の社会では特に、この「愛する」ということがとても軽んじられているのではないのでしょうか。

どう考えても理不尽な暴力や、虐殺とも呼べるような戦争が、未だに止められることなく続いています。自分と意見が違う相手を攻撃的な言葉で罵ることが、SNS でもリアルな

場所でも珍しくなくなってきました。

年齢や経済状況、性別や国籍といった違いで、人と人を分断して対立をあおる構造が、社会のあちこちに生み出されています。弱い立場に立たされている人たちを、切り捨てて見捨てるやり方が「合理的」だと主張する政治家や、それを支持する人が増えているように感じます。

私たち人間の身勝手さは、この世界で共に生きる他の命を「愛する」ことから、どんどんと遠ざかり続けているように思えてなりません。もはや歯止めが効かなくなっているこの状況を、そして私たち自身を変えられるものは、神様を愛し人を愛する「信仰」だけなのではないのでしょうか。

「愛する」ことからどうしようもなく遠ざかってしまう私たち人間の罪を背負って、イエス・キリストは十字架の上で死なれました。そしてその死から復活されて、新しく生きる命の道を切り開いてくださいました。

イエス・キリストの父である神様が、豊かな憐れみによって私たちを新しく生まれさせてくださったのだと、聖書の言葉は力強く宣言しています。

愛せない者から愛する者へ。

イエス・キリストを信じる信仰によって、私たちは新しく生まれるのです。人を分断して、対立させて、切り捨てて殺してしまう罪から、人を結び合わせて、支え合せて、生かし合わせる愛へ。

滅びゆくしかない絶望から、生き生きとした希望へ。

イエス・キリストの復活の命こそが、私たちを新しく生かすのです。

瑞々しい若葉や咲いたばかりの花、新しい枝や新芽のように。生き生きとした希望は、私たちだけでは終わらずに伸びて広がって、この世界を新しく生かす力になっていくでしょう。

今ここにいる私たちが、その大きな変化を見ることはないのかもしれませんが、それでも、先に召された人たちから受け継いだ信仰が、希望が、愛が、私たちからまた後の人たちへと受け継がれるなかで、変えられていくものがきっとあります。

死者の中からイエス・キリストを復活させた神様に、できないことは何もないのですから。

「あなたがたは、終わりの時に現されるように準備されている救いを受けるために、神の力により、信仰によって守られています。」

そう今日の聖書の言葉は約束しています。

「もうダメだ」と諦めて絶望したくなるような試練に、出会わされる時があるでしょう。争いや差別や暴力がこの世界からなくなる日は、まだまだ遠いのかもしれません。

それでも終わりの時には、救いが準備されている。イエス・キリストが再び来られ、この世界のすべてが新しくされる救いの日が来る。この救いを受け取るために、神の力により、信仰によって、私たちは守られている。

この約束を受け取って、召天者記念礼拝の今日、改めて私たちはこのイエス・キリストの教会から送り出されていきましょう。

この体の命をいつどのように終える時に

も、「また会えるよ」と心から笑えるように。

「愛する」ことから遠ざかり続ける社会の中で、それでも生まれ育っていく子どもたちに、生き生きとした希望を手渡せるように。

主の導きと助けを祈り求めながら、神様と人を愛する人生へと、これからも一緒に踏み出してまいりましょう。

お祈りいたします。